



いつきが生まれたところ



7月×日

さて土曜日だ。メニューを考えなくちゃ。…思いつかない。てか、考えるのがめんどくさい。まあいいか、その場になつたら思いつくだろう。

午後7時。会場のカギを開ける。とりあえずお湯を沸かして一息ついていると、続々と人が集まってきた。さて、カフェ玖伊屋のはじまりだ。

* * *

わたしが玖伊屋と出会ったのは、1999年1月12日のことでした。なにげなく新聞を開くと「揺れ動く『心の性』」「『二者択一』ではない自分」という言葉と「カフェ玖伊屋」という文字が飛び込んできました。この記事は、朝日新聞京都版の特集「しあわせさがし」の一環として、カフェ玖伊屋を取材したものでした。レズビアン・ゲイのコミュニティにはようやくアクセスできたものの、トランスジェンダーのコミュニティにはまだアクセスできていなかったわたしにとって、ようやく見つけた「自分の場所」でした。

でも、すぐにカフェ玖伊屋に参加したわけではありません。普段は平気で夜遊びをしているわたしなのに、「夜遅いし」「京都市内で遠いし」と、いろいろ理由をつけてどうしても行こうとしませんでした。そんなわたしを後押ししたのはパートナーでした。「行きたいんやろ？ 行ってきたら」。このひとことをきっかけに、2000年3月、はじめてカフェ玖伊屋に参加しました。

やっとの思いでたどりついた会場に入ると、部屋の中には大きな机、その上にはパーティーを開けたボテチの袋がひとつだけ。参加者は会話もなく、『ひまわり』や『くいーん』を読んでいました。「こんなところ、二度と来るものか」ととっさに思いました。それでも持つて行ったスカートに着替えて、軽くメイクをしました。なんとなく「話ができそうだなあ」と思った人が、主宰者の阿倍まりあさんでした。初参加にもかかわらず、カウンターの中に入つてまりあさんと語りあいました。

夜も更けた頃、流れていたゆっくりした曲にあわせて、体をゆっくりと左右に揺らしてみました。スカートの裾がふわふわと左右に揺れました。その瞬間、「ああ、わたしが求めていたのは、これだったんだ」と思いました。おそらくそれが「いつき」の生まれた瞬間だったんだと思います。

1か月後、まりあさんと会いたくて、再び玖伊屋に参加しました。せっかくなので、会場近くで買ったたこ焼きを持って行きました。すると「暖かい食べもんや！」と、みなさん大喜びされました。思わず「食べ物、ほしかったんかい！」とツッコミを入れそうになりました。それ以来、料理を持って行ったりつくったりするようになり、気がついたら料理担当スタッフになっていました。

玖伊屋はいわゆる自助グループではありません。もともとは「京都で気軽に女装できる場所」をコンセプトにつくられたのですが、今は単なる「夜通し宴会」の場所になっています。参加資格は特になく、ドレスコードもありません。約束事は「セクハラ厳禁」の一つだけです。スタッフが行うのは料理をつくることと皿洗いぐらい。自己紹介を強制することも、話し合いをコーディネートすることもしません。でも、その緩さを求めてか、関東をはじめ、四国や北陸、山陰から参加する人もいます。また、トランスジェンダーだけではなく、レズビアン、ヘテロ女性、ゲイはもちろん、在日外国人や障害者問題にかかわる人などさまざまな人が集まってこられます。参加した人は、それぞれがそれなりのおしゃべりをしながら、緩い時間を楽しんでおられます。

実は、わたし自身はもう玖伊屋を必要とはしていません。でも、わたしが「いつき」になれた「場」が玖伊屋であり、かつてのわたしと同じように玖伊屋を必要としている人がどこかにいるならば、その「場」を続けることが玖伊屋への恩返しかなと思っています。京都にお越しの際は、ぜひ玖伊屋にいらして下さい。(高校教員 土肥いつき)